

# 聴覚障害児の作文評価における評価観点の特徴

—印象評定による分析的評価を中心とした検討—

○新海晃<sup>2</sup> 澤隆史<sup>1</sup> 林雄大<sup>3</sup> 大川将貴<sup>3</sup>  
 (東京学芸大学<sup>1</sup> 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科<sup>2</sup> 東京学芸大学大学院教育学研究科<sup>3</sup>)  
 KEY WORDS: 聴覚障害 作文 評価

## 【問題と目的】

聴覚障害児の書く力の向上を図る上では、その適切な評価方法を確立することが求められており、従来より様々な手法を用いた検討が行われてきた。中でも、新海・澤・林 (2016) は、全国の聾学校教員に対して作文の指導や評価の観点の重要度に関する質問紙調査を実施し、定性的分析によって7つの評価観点を提示して印象評定における評価観点としての有用性を指摘している。一方で、7つの評価観点を使用した実際の評価結果との整合性や、言語要素の使用傾向等に基づく文章の特徴との関連性の検討が課題として残された。本研究では、新海ら (2016) の7つの評価観点による印象評定と多数の言語要素による分析を行い、評価観点としての有効性及両者の関連性について検討することを目的とした。

## 【方法】

1. 対象作文：聾学校の小学部高学年（以下、小高部）と中学部に在籍する児童生徒が書いた作文 48 編（小高部 24 編、中学部 24 編）。いずれも学校行事や日常生活における経験について書かれた自由作文であった。

2. 作文の評定：聾学校小高部及び中学部を担当する教員それぞれ 10 名ずつに評定させた。評定には新海ら (2016) の7つの評価観点（分析的評価）と総合評価の計 8 項目を用いた。分析的評価は 7 点満点、総合評価は 10 点満点で評定させた。なお、いずれも簡易な表現に代えて使用した (表 1)。

表 1 印象評定に用いた分析的評価項目

新海ら (2016) の評価観点	分析的評価項目 (略称)
文構造	文の骨格 (骨格)
言葉の誤り	基本的な文法力 (文法)
文法表現	係り受け (係受)
表現技法	修辭的な表現 (修辭)
叙述	文章表現の多様さ (多様さ)
内容構成	文章のおもしろさ、オリジナリティ (面白さ)
形式・表記	作文のルール (ルール)

3. 言語要素による分析：澤・新海・相澤・林田 (2017) で使用された 50 の言語要素を参考に一部変更を行い、最終的に 48 の分析項目を使用した。使用した項目については、形態素解析の結果に基づいて各言語要素の出現率等を求めた。

4. 分析方法：印象評定の結果は標準得点 (z 得点) に変換した。48 の言語要素の使用数等については、藤田・藤田・田村 (2012) に従って標準化した値 (以下、標準値) を算出した。

## 【結果】

### 1. 総合評価に影響する分析的評価の検討

小高部と中学部のそれぞれで各作文に対する各評価者の標準得点の平均値を項目ごと (8 項目) に算出し、総合評価を目的変数、分析的評価を説明変数とした重回帰分析を行った (表 2)。決定係数 ( $R^2$ ) はいずれの学部でも高い値を示した。一方、標準偏回帰係数の値から、「骨格」を除く分析的評価が総合評価に有意に影響を及ぼすことが示された。

### 2. 総合評価及び分析的評価に対する言語要素の影響

学部ごとに、各作文における 8 つの評価項目それぞれの標準得点の平均値を目的変数、48 の分析項目の標準値を説明変数としたランダムフォレスト法 (RF) による回帰分析を行い、評価に対する言語要素の重要度を示す指標である純度を算

出した。総合評価に対して純度の高い上位 5 項目と分析的評価における純度との関係をまとめた結果 (表 3)、いずれの学部でも 8 つの評価項目に対して重要度の高い分析項目は類似する傾向にあることが示された。

表 2 総合評価を目的変数とした重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰変数 ( $\beta$ )	
	小高部	中学部
分析的評価		
1. 文の骨格	0.05	0.05
2. 基本的な文法力	0.12**	0.18**
3. 係り受け	0.12*	0.10*
4. 修辭的な表現	0.13**	0.15**
5. 文章表現の多様さ	0.27**	0.10*
6. 文章のおもしろさ、オリジナリティ	0.13*	0.27**
7. 作文のルール	0.23**	0.19**
決定係数 ( $R^2$ )	0.87**	0.94**

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$

表 3 総合評価に対して純度の高い上位 5 項目と分析的評価との関係

分析項目	小高部						
	骨格	文法	係受	修辭	多様さ	面白さ	ルール
モダリティの種類数	1	5	2	1	1	1	1
認識のモダリティ	4	3	3	2	3	6	7
単語表記の誤り	5	2	5	8	8	—	9
自立語の R	—	—	9	6	—	5	6
動詞の R	8	10	—	3	4	7	—
分析項目	中学部						
	骨格	文法	係受	修辭	多様さ	面白さ	ルール
文法的誤り	3	1	1	1	5	6	1
単語の心像性	6	3	3	—	7	1	4
動詞の R	2	4	6	3	2	2	2
複雑な構文	1	2	2	—	9	4	—
文字数	7	6	5	—	3	9	5

数値は各分析的評価における分析項目の純度の順位 (10 位まで記載)

R : 言葉の多様さを示す指標、異なり語数を延べ語数の平方根で除した値

## 【考察】

本研究の結果、新海ら (2016) が示した 7 つの評価観点は、印象評定における総合評価の結果を説明し得ることが示され、その有用性が示唆された。一方で、7 つの評価観点の多くが総合評価に有意に影響を与えていること、8 つの評価項目と言語要素との関係性が類似することが示された。これらの結果は、小高部及び中学部では各評価観点が均等に評価されることを示唆するものであるが、本研究が日常的な経験に基づく自由作文を中心に扱ったことを考慮すると、文章を書かせる目的 (例：論題、読み手) 等の要因が本研究の結果に大きく関与した可能性を指摘できる。それ故、今後は、文章の種類等による評価観点の重要度や言語要素の使用傾向の差異について検討することが必要であると考えられる。

※本研究は、平成 29 年度科学研究費基盤研究 (C) (課題番号：15K04544) の補助を受けて行った。

参考文献：澤・新海・相澤・林田 (2017) 東京学芸大学紀要総合教育科学系 II, 68, 193-202. / 新海・澤・林 (2016) 日本特殊教育学会第 54 回大会発表論文集, P7-49. (SHINKAI Akira, SAWA Takashi, HAYASHI Yudai, OKAWA Masaki)